

第八章 きたない策略

身体の破片が東京北千住駅の下り線路沿い数百メートルにわたってみつかり、人々は叫び声をあげていた。死体はバラバラで、男か女なのかすらわからなかった。

夜が明けた一九四九年（昭・二四）七月、レール付近で身分証明書がみつかり、壊れた時計は午前零時二十分を指していた。

被害者は下山定則四十九歳、国鉄総裁である。彼は悪名高いヤクザにリベートを払い、国鉄職員として雇った復員兵数千名を解雇しようとする間違いを犯した。

不思議なことにその時から、新聞は（マッカーサーの占領指令本部SCAPに支配されていた）下山総裁が日本共産党の陰謀によって殺されたという世論を作り出そうとしていた。

数日後の労働争議では列車が破壊され、三人の死者がでた。再び共産主義者が非難され、二十名の労働者が検挙され、裁判にかけられた。（その九割は労働組合幹部が各種の左翼活動家だった。）

彼らの事件は二十年以上、日本最大の疑獄事件のひとつになっていた。この事件は一九七〇年（昭・四五）、罷だったとして赦免され、政府が損害賠償する判決が出るまで続いた。多くの日本人は下山殺人と列車爆破は、ヤクザの助けを借りたアメリカの諜報員の仕事だったと信じていたし、今でもそう思っている。半世紀過ぎてもアメリカ占領の全記録は極めて嚴重に密閉され、真実は今でも知ることはない。

下山暗殺は、六年に渡る占領期間にアメリカと日本の入念な共謀によって行われた被害者の象徴であり、共謀は今日もまだ続いている。それは戦後のアメリカを席卷したマッカーシーの魔女狩りの頃最高潮に達した。反共産主義アレルギーの必然的帰結だと思われるが、このヒステリーはソビエト連邦が崩壊し、ベルリンの壁が消え、中国共産党が資本主義に転換してもおさまりはしない。彼らにとって非常に都合の良い方法なので終わらせるには惜しいのだろう。

そのヒステリーは今でもアメリカ、日本に現れ、新しいラベルを貼り、新しい蔵の中に理由を捜して・・・。

サンタ・ロマーナの財宝の発見を考えると、終戦後の殺人と共謀の背後にある動機が反共産アレルギーだけだった訳ではないようだ。

別の要因がまったく報告する必要のない大量の裏金を引き出すことになったのだ。

アメリカが日本で秘密の政治活動基金を設立し、天皇家、支配者エリート、地下組織に対し、そして右翼体制を保持するために使用したということは間違いのない証拠が示している。

証拠文書は、まずその資金がマッカーサー司令部の幹部将校の支配下で東京裁判の目撃者への賄賂として使われ、ほぼ間違いなく、進歩的な政治家や左翼組織幹部の暗殺に使われたことを明らかにした。

Yamato Dynasty で書いたように日本の右派指導者は、その時代のアメリカの反共産主義者に対する恐怖と彼らの望みを熟知しており、全力でそして巧妙に答えたのだ。

日本の民主化は後退し、政府は戦犯を復帰させた。特筆すべきは岸信介周辺の人達だ。地下社会のドン、児玉誉士夫が戦時中に貯め込んだ財産で創立し、資金提供した岸の政党、自民党は、アメリカ政府の後押しを力強く受け、無制限でかつ証拠のいらぬ資金の供給を受け続けた。

いったん国家機密で隠されたルートを使って引き出された闇金の数百万ドルが何に使われたかを見届ける必要はない。ルーズベルトとトルーマンのもともとの戦略的な目的がどうであろうが、その基金は開示する事に何の関心もなく、自由に、望むまま使うことの出来る墮落した人々の手に落ちてしまった。

共産主義に対して盛り上がった恐怖は、転換期に二つの国が作り出した多くの疑問点を両国の国民に隠してしまった。

国家機密を引き合いに出すことによって、将校達は多くの書類を隠し、二十一世紀になっても深い所に置いたまま見ることが禁止してきた。

アメリカでこれに抗議する者は「日本たたき」と嘲られるか、もつと最近では「テロリスト」と言われる。日本で明らかにしようとする者は自殺志願者になるだろう。

その間、日本と世界の他の国々には新しいお伽話と間違った印象を作り出すプロパガンダであふれていた。まず最初に、SCAPに支配された新聞社とウォール街でマツカーサー後援者に借りを作った従順なる記者達を通じて、日本は被害者に対して補償も賠償も支払えない貧乏で打ちひしがれた国として描かれた。

ワシントン政府は日本が盗んだ大量の財宝の存在を知っていたはずである。本土のあちこちの地下金庫にそれは眠っており、大量の金があることは明らかだった。(現金に換えることができなかったか、金に換えられた盗品絵画や文化遺産について何の話も出ていなかった。)

一九五一年に調印した講和条約は今から言えば、日本のエリート達が個人的に略奪した財宝を手放さなくてもよいと言う保証をし、冷戦の中、日本の協力を得るための不誠実な共謀であったように思える。

この条約には第十四条が追加され調印されている。

それには「日本は戦争期間の苦痛と被害に対し、連合各国へ賠償金を支払うべきだと認める。しかしながら、日本にはその原資がほとんどないことも又認めるところだ・・・だから日本によって引き起こされた事から起きる、連合国及びその他の国々の賠償請求は全てチャラにしようじゃないか。」とある。

この項目で、長い間捕虜や市民強制労働者が、日本の大企業、例えば三井、三菱、住友などで苦役に従事した苦痛と残虐さの補償を受け取れなくなる教条になってしまった。

今日においても、日本の財閥や政府を保護している国務省と司法省は、被害者によるそのような大企業を訴えるいかなる試みをも防ぐために、必ず一九五一年の講和条約第十四条を引き合いに出してくる。

現実にサンタ・ロマーナの回収が明らかになった以上、嘘とごまかしで作

られた条約は無効のはずだろう。

冷戦最初の数年間、アメリカ政府が枢軸国の戦時略奪金をどの様に使ったかの例は日本だけにある訳ではない。

一九四八年(昭・二三)に行われたイタリア選挙はもう一方の例である。戦後のイタリアでは、CIA情報員ジェームズ・ジーサス・アンジェルトンがムツソリーニの軍隊の略奪したエジプト財宝を回収した。この財宝は貧困にあえぐエジプト市民に返されず、イタリア選挙においてアメリカ代理人による反共産主義者への資金融資に使われた。

付け加えるなら、情報員は米軍余剰物資の販売で大金を獲得し、その金をイタリアにおける共産主義戦争の中心地、バチカンに投入した。

そしてこの情報員は、選挙中に反共産主義活動用の個人口座からローマ法王へ一億リラを用意した。バチカンが戦時中、裕仁とナチスの財産を隠匿していた事を知った今、これはそんなに驚くほどのことではない。

そしてそれはレイ・クラインの言う、回収されたゴールド・リリーの金の延べ棒が運ばれた四十二カ国の一つだったのだ。そしてそれは、サンティがいろいろな名前で口座を設けた銀行のひとつでもあった。

一九六〇年、アンジェル-ton はしばしばゲシュタポと蔑まれながらもワシントンでCIAの対諜情報員の職員をしていた。彼は自分だけの「非常に機密性が高く決して開示されない不正資金」を持っていた。CIAの諜報予算情報の歴史(実際幾らの隠し基金を使ったか)は今日でも大きな機密のまま、誰が買収され、又、強要され、あるいは何十年がたち、清算したのかどうか、どんな判断ミスをし、どんな馬鹿者が買収に関わっていたのかは決して明らかにできない前提らしい。

我々はこの事実が、受取人を、又は資金を不正に使ったアメリカ高官を守ろうとしているのかどうか疑いの目でみている。

一九四八年のイタリアにおける選挙操作のような隠れた行動はトルーマンドクトリンとよばれる暗部である。トルーマン大統領は、このようなことは世界的な指導力を持ったためのアメリカの義務であると宣言し、冷戦が将

来の米国の外交的軍事的な理念に一致することを明らかにした。これは一九四八年以来、アメリカ政府の外交理念の骨格である。

同じ様な隠れた米国による仲裁はギリシヤでも起こった。英国はギリシヤの国庫は空っぽだと指摘し、ギリシヤとトルコの役割を止め、地中海の東端までのすべての資金的、軍事的な援助をやめるよう強要したのだ。共産主義が広がる恐怖から、ロンドンではアメリカ政府に真空地帯を引き受けるよう訴えた。ギリシヤは市民戦争の真つ只中、トルコは陥落寸前だった。米國務長官デイーン・アチソンは「病気の樽の中にある腐った林檎」とよんだ。(後にドミノ理論とよばれた)

トルーマンは両議会の開催を求め、ギリシヤとトルコへ四億ドルの援助を要求した。彼は言う、「現時点では殆どどの国家でも、自分達の生き方を二者択一で決めなければならぬ・・・生き方のひとつは、大多数の意志を基準とするものだ。そこには自由な制度、国民に選ばれた政府、自由な選挙、個人の自由の保障、言論と宗教の自由、政治的圧制からの解放などで特色づけられる。もう一方の選択は、少数の意志を基本にして多数を力づくで威圧することだ。それは恐怖と虐待、支配された言論、固定化した選挙、個人の自由への圧迫、などに頼らなければいけなくなるだろう。」

秘密裏にトルーマンは君主国家の政治活動に介入、選挙の買収、法の効力を傷つけ、報道を支配し、暗殺を実行、そして戦争状態にない国にアメリカの勝手を押し付けるため、枢軸国の戦時略奪資金と、他の保証人のない基金の使用を認めた。

これらの汚い策略はフランク・ワイズナーによって提出された。彼はアジアにおいて格別に行動の自由を持っていた。CIA長官アレン・ダレスはアジアの事をほとんど何も知らなかった。だから世界のアジア部分を完全に、OSSにおける異端者「中国武者」(カウボーイ)グループなどが所属するワイズナーの政策協同事務所へ、丸投げしてしまった。

一九四九年の共産党の勝利で中国を追われた「中国カウボーイ」達は、日本、韓国、そして蒋介石と共に、逃れた台湾で再編成した。

ワイズナーは戦後の米国秘密作戦の中ではとても重要な立場にあり、やって来た多くのアメリカ人の中でも特に汚い性格だった。

戦時中はOSSと共に、イスタンブール、カイロ、ブタペストで過ごし、ナチスと戦うよりもソビエトとの戦いに興味があった。戦後はドイツに居るかまえ、アメリカがナチスの跡を継ぎ、反ソビエトの五つの柱を作り上げる方策を考え出した。

彼の力強い友人、ダレス兄弟、ジョージ・グーナン、アベレル・ハリマン、ジョー、スチュアート・アルソップらはワイズナーの奇抜な考え方、つまり破壊とストライキ、暗殺を使った陰謀を歓迎し、その汚い計略をすすめるようにCIAでの職を与えた。

ワイズナーは、今ではアメリカの代理と同義語であるが、反共産主義だと主張する怪しげな態度の人間ばかりを雇った。

彼らもつと右翼だったら、ナチと日本の戦犯達は金融的援助を受ける資格があつただろう。

イワン・トーマスによると、ワイズナーは隠密部隊にマーシャルプランの基金を流用することで資金を融通したそうである。彼は情報員にアメダマを渡し、「全部は使い切れないぞ」「制限はないし、誰も勘定する必要もない。」と言った。

この仕事は四年で終わる一九五二年までだけで、ワイズナーは海外に四十七箇所拠点を作り、三千名近い職員と、それとは別に契約職員三千人を持ち、年間の公式予算は八千四百万ドルになっていた。非公式な予算がどのくらいなのかは推測するしかない。何故ならばここは秘密の汚い策略の帝国なのだから・・・。

ワイズナーは他に古手のOSSに助けを求めた。ワイズナーよりもつとアジアを良く知っているデスモント・フィッツジェラルドだ。ランスデールは彼らのお気に入り情報員の一人で、ナポレオン・バレンチノに率いられたフィリピンの殺し屋を連れて日本、韓国、台湾、インドネシア、タイ、インドシナで暗黒大陸方式の暗殺を実行していた。

ワイズナーとフィッツジェラルドが資金を手にしたにもかかわらず、この隠れた作戦は成功しなかった。

ランスデイルは慢性的な病気とは決して認めていなかったが、一九六三年に無理やりCIAを引退させられた。と同時に情報員の「気の狂った帽子屋」、ワイズナーも「神経的な病気」にかかり急遽引退した。

CIAの情報筋が言うには、「ワイズナーはここ数ヶ月それらしい兆候は見せていた。そして突然に発狂したんだ。」

アメリカは多くの闇の作戦で泥沼にはまり込み、CIAの新しい長官や副長官が行ったりきたりしていた。

アンジェルトンがイタリアで干渉していたように、戦後の日本では盗んだ財宝と基金を元にSCPとCIAが政治活動の基金を設立していた。かなりの部分はサンタ・ロマーナの回収した財宝だった。残りは日本にいた米陸軍第八部隊が発見し回収したもので、延べ棒か、ダイヤそのままか、あるいは貨幣に換えられていた。

戦後CIAと密接に繋がっていた東京大学法学部の学生、高橋敏夫によるとマッカーサーこそM資金設立の張本人だったという。

「ジョージ・マーシャルがヨーロッパでやった様に、日本経済を立て直すには、まとまった金額が必要な事はマッカーサーも認めていた。ところが、予算獲得のために議会に行ったマッカーサーは、国家の帳簿には記載されていない莫大な原資を日本皇軍が持っている事に気づいたのだ。日本軍は半世紀近く朝鮮を占領していたし、中国のかなりの部分を長年に占領していた。だから東南アジア、フィリピンなどの地域で生み出した資源を軍が日本へ持ち帰っていたのだ。マッカーサーは日本の経済の再建に使われるべき実際の基金はさておいて・・・しかし、マッカーサーは、例えば政治を動かす目的に一般の監視が十分にできない金が幾らかは必要な事をわかっていた・・・マッカーサーはこの資金を秘密事項にすると決定した。そうすればその一部分を戦後の日本民主化の手助けにし、それに関わる政党や政治家の献金に使う事ができるからね。」

日本の著名な記者で、日経からM資金の研究を出版した調査専門の記者、高野孟によると、備蓄してあった没収品のダイヤ、金、銀、他の希少金属の販売、日本にいる米国外交官が行った闇市場での販売で、びっくりするほどの現金が集まったという。他の原資はいくつかの小さな財閥を解体し、実際のところ例としてあげるのだが、法的には特例で大企業へ売り飛ばしたのだ。

始まった時のM資金の規模はよく知られていない。しかし幾つかの情報源は二十億ドルと考えている。そしてそれはすぐに膨らんでいった。

長い間東京で通信員(駐在員)をしていたロバート・ホワイティングは、「秘密の何十億ドルの不正資金・・・は一九五〇年の日本GNPの10%に近かった。」と言っている。

ホワイティングは我々に語った。日本政府はもの凄い量の備蓄してあった金、プラチナ、銀、銅を闇市場で売ったんだ・・・彼らは敗戦を見越し、一九四五年の初旬にそれらを隠したんだ。」

日本軍が供給した殆どのも、本土決戦のために備蓄されたものは全て消えてしまった。

M資金についての記事は信頼のおける日本の週刊誌、「週刊文春」で一九七九年に公開された。それによると、物資の不正販売で得た莫大な金は高級官僚と政治家の所へ行ったという。雑誌によると日銀に収納されていた八十万カラットのダイヤが、どうしてかわからないが、たった十六万カラットに減っていた。

「占領が終わった後ですら、アメリカ側による裏の闇資金への移動は続いていた・・・政治的な陰謀に使うためだ。」

別の源は、地下組織の児玉基金だ。彼は戦時略奪物資を個人用として百三十億ドル貯め込んだと報道されている。これにはトラック二台分のダイヤ、金のバー、プラチナの塊、ラジウム、銅、そして他の重要な資源も含まれている。週刊文春が言うには、児玉はマッカーサー達に気に入れられるため、ラジウムをSCPに売却したのだそうだ。東京ジャーナルでジョン・

キヤロルは、「児玉は戦争終結時に皇居内にある皇室地下金庫へ自分の宝物をたづぷりと運び込んだ。」と声明をだした。

彼は長い間、殺人や誘拐、麻薬、強請りなどに関わっていたにもかかわらず、裕仁天皇から真の愛国者として思われていた。おそらくゴールデン・リリーのかなりの部分を彼が生み出したからだろう。

それなら、何故日本のギャングの親分が自分の略奪品を皇居の金庫に隠匿することを許されたのかの説明ができるだろう。

(訳注、児玉と大森実の対談では、児玉は皇室の金庫の中がからっぽでもないので貸してやったのだと語っている。そして、金庫はみかん箱ひとつしかなかったと語った。まさか?)

そして、それは麻薬を含めるといっそう強くなる。

一九四五年の春、児玉は台湾へ出張しヘロイン、モルヒネの残った在庫と共に多くのヘロイン設備を分解し日本へ戻すところを監視した。

帰国した彼は戦後の占領時代、しばらくの間首相を務めた裕仁の叔父、東久邇の特別顧問に任命された。児玉自身の記憶によれば、降伏後、しばらくして東久邇は、「内閣の大臣には知られないよう、二、三人の米国顧問官と秘密の接触を持ち、横浜でマッカーサーを訪れている。」

児玉がこの会合で何を話し合ったのか、殿下と同行したのかどうか、いずれも明らかにしていない。

児玉は戦犯として二年間を巣鴨で過ごした。しかし一九四八年中頃、ウィロビーと取引し、CIAに一億ドルを提供するや魔法の様に巣鴨から解放された。(今日の価値ならば十億ドルだ。)

この支払いにより、児玉は刑務所からの自由を獲得し、戦犯としてのすべての訴追からも解放されたのだ。

この金はアメリカ大使館のCIAが支配する秘密の不正基金のひとつになった。後に彼の名前はCIAの従業員名簿にのり、一九八四年に亡くなるまでそこに名前は存在していた。ニューヨークタイムズのタッド・ツルクは「児玉はCIAに關係する仕事をしていた。」と書き、シャルマール・ジョ

ンソンは「児玉はたぶんCIAの日本財務長官だったんだ。」と言った。米政府の文字どおり従業員だった児玉は、戦後日本の麻薬密売を監視し続け、ヘロイン工場を台湾ばかりか北方中国、満州、朝鮮からも引き上げてきた。日本と製造、販売で協力してきた中国人は聖域が与えられ、日本の農場で生産を始めた。

アジアでの三大麻薬王のうち二人はまもなく死ぬ。愛国者、「戦李(タイリ)」は一九四六年飛行機事故で暗殺された。上海の大親分、杜月笙(ツー・エンシェン)も一九五一年、香港で天寿をまっとうした。

児玉は米国の雇員であるうちはアジアの麻薬王として残った。

彼が日本における麻薬の支配者だったことは広く知られており明白なのが、これはまたやっかいな問題になり得た。しかし、冷戦が突然終わり、事態は北極の白夜のように明るなものとなってきた。

占領中、米国のプロパガンダ(悪徳広報)はアジアの薬物売買は左翼と共産主義者の仕業だとまくしたてた。

本当のところ日本の児玉と、国民党麻薬軍団を通じ蔣總統に支配されていた黄金の三角地帯が拠点だった。

その麻薬部隊は總統の息子、国民党軍情報司令官、蔣経国の直接支配下にあった。(黄金の三角地帯の麻薬軍事指導者は二人の將軍、つまりツアンと李がいたと率直に語ってくれた。)

日本に関してリチャード・フィルマン教授は、一九九三年のパシフィックレビューで次の様に書いている。「占領軍はもちろん日本の犯罪組織もだが、戦時中に日本政府が生産した麻薬や・・・その備品を接收し・・・」

日本の国民に麻薬を広めるため、SCAPの将校から医薬品を配給するように請け負ったアメリカ兵や中国、韓国、台湾の仲介人へそれを一緒に横流しすることで闇市場へのせる方法を見つけたんだ。山口組と稲川会のヤクザは、日本を拠点とする韓国ヤクザとの指導者とのつながりを密にし、台湾、韓国、中国の古い犯罪組織を締め付けながら、南朝鮮と日本の間に国境を越えた製造、販売の垂直総合組織を發展させたのだ。」

この強烈な汚職と巧妙な嘘で、アメリカが日本に設立した政治活動基金が方向転換することは避けられなかった。

しかし、汚職、ごまかし、道徳の欠如は日本人のみを責めるわけにはいかない。アメリカ人はこの基金の方向転換に関わっており、その悪用から利益を得て、今も色々な方法でそれは続いている。

占領期間中に、アメリカ人将校は三つの不正資金を支配していた。

即ち、M資金、四谷基金、キーナン基金だ。

高野孟によると、M資金はSCAPの経済、科学部門の長であるウィリアム・フレデリック・マークアットにちなんで名付けられた。

理論的に言うとマークアットは戦争の不当利得を貯め込んでいた。日本を罰し、日本経済を立て直す計画の長であった。ところが、現実にマークアットの公的業務の悩みは天皇家がほとんどを占めた。つまり、天皇家のいかがわしい利益をどのように隠すかであった。

歴史家のジョン・ドウワーは次の様に説明した。「マークアットは財閥企業の解体、経済非集中化の推進、金融、経済のすべてを監視することです。何の責任もないようにみせかけている。主要国の財務、経済機構は、彼の部門のことを財務省であり通産省であり日本銀行をも包括していると報じている。」

マークアットについてはあまり書かれていないが、普段は煙草好きの気の優しい男で仕事人間ではないと描かれている。これにはびっくりした。彼は、ウィルロビーとホイットニーと同じくマッカーサーの身内派閥の一員で、バターン仲間だった。彼のもっぱらの売りは不滅の忠誠心だ。

ジョン・ガンサーは「マークアットは自分の赴任した地域の状況にはほとんど注意を払わず、ある時、私は経済問題の重要な会議で彼の主席補佐をやったが、こう言ったんだ。「なんてひどい経済なんだ、どうすりゃいい？」、てね。」

マークアットは、戦争に資金を出し、それによって潤った銀行と財閥を解散させると思われていた。ほんのささいな化粧直しといくつかの財閥を破

産させ、売却をさせたものの、戦争で儲けた大企業にはなんのとがめもなくリストから除いてしまった。

彼は又、日本の生物化学兵器部隊七三一部隊の起訴と処罰を見送った。その代わり、米政府は秘密裏に七三一部隊を吸収し、殆どの科学者と文書をメリーランド郊外のフォート・デトリックへ移送した。

その活動についての全情報、生物兵器の残虐行為、生体実験の恐ろしい記録はワシントンにより、アメリカ国民にも日本国民にも、そして東京裁判からも隠匿された。

アメリカ政府が握った七三一部隊の記録はいまでも極秘のままだ。

(訳注、ご存知だろうか、エイズを生み出したのがこのフォート・デトリックである事を。そして、薬害エイズで有名なミドリ十字の役員は731部隊の生き残りであることを。)

マークワットが日本をより民主的にすると思われる時、彼は逆の事をしていた。

M資金は、反共産主義が強固な右翼に近い日本政治家を選挙で勝たせるための買収資金として生み出された。

日本はアジアで最も工業化された国だ。アメリカ政府は日本を共産主義に對して、労働組合も左翼組織も革命も必要ないほど豊かな筈にしようとしていた。これは、ルーズベルトが共産主義者だと考えるアメリカ保守層の見方であり、英国はドイツ、日本と協調しソ連との戦争を避けるべきだと信じた。

日本を改善しようとするこの考えと計画は、戻すばかりになるか、又は無理な話だった。(大きな例外は農地改革だ。これは中止されるまでは完全に成功していた。)

M資金の初めての適用は一九四〇年代末、社会主義政権が突然、日本の選挙に勝った時だった。SCAPは社会主義の成長に驚き、衝撃を受けた。

すぐに巨額な資金が投入され、社会主義政権の評判を悪くし、ワシントンとの連携がスムーズにいくような政権と置き換える運動を開始した。後に

日本が中華人民共和国との関係を考え始めたとき、再び日本を右側に戻すため、巨額の資金が投入された。

吉田茂が首相になった時、吉田は信用でき、保守であるし、とても裕福だったので、アメリカ政府の緊張は緩んだ。吉田が首相だった時、M資金は吉田基金とよばれた。

彼が首相をやめた後、M資金の名で再開した。(一九八七年の対談でホワイトハウス国家安全顧問のリチャード・アレンは、「私の生涯の中で、吉田基金のことは聴いたことがある、それはすべてM資金のことだと考えている。」)

M資金と大変異なっていたのは四谷基金だった。これは日本の地下組織を操り導くため、汚れた仕事、強奪、誘拐、殺人に対する資金だ。

マッカーサーの愛する独裁者で SCAP G2 の長官だったウイロビー將軍は、四谷基金を支配し、児玉とヤクザ軍団に精力的に働きかけ、占領中の左翼活動や市民の抗議行動を抑圧した。

民主主義の概念は意見の相違に寛大なので、日本の支配者エリート達は西洋からの有害な考え方。」とみていた。日本ではささいな異論でさえ許されないのだ。

アメリカがマッカーシー旋風の時代、意見の相違を抑圧することは反共産主義と同義となった。(一九五〇〜五四年上院で共産党狩りが行われた。)

しかし、この時期における日本の魔女狩りもつと厳しく、いまましいものだった。ウイロビーはG2の長官であったが、その仕事の後半、情報収集や反スパイ活動というよりむしろ汚い策略に関わっていた。別の仕事の中、彼の四谷基金は、北朝鮮、共産中国、ソ連東部へスパイを送り込む韓国連絡事務所に融資された。ウイロビーが自分の地下基金の名前にした四谷地区というのは、戦後の数年間、ギャングや売春婦、ドヤ街の親分達などの墮落したみすばらしい人間が住む闇市の中継地で、非合法の賭博や売春宿が盛んな眠らない街だった。(今日の四谷は変わり、大学生や企業の重役が常連となるような飲み屋街として有名になっている。)

アメリカ人のテッド・ルーインや児玉の仲間によって運営されていたマンガリンクラブの様な賭博場や売春宿など、戦後の悪事からのリベートは、日本でウイロビーの汚く陰湿な作戦を実施していたキャノン機関に融通された。

米軍大佐J・Yキャノンのために名付けられたこの機関は、殺人請負会社の軍隊版で「死の部隊」だった。ジャック・キャノンは学生運動のリーダー、改革派、左翼主義者、社会主義者、労働組合主催者、学者、記者、邪悪なものは誰であろうが、たたき出し、そして殺した。キャノンは韓国で児玉の代理人、朝鮮民族派ヤクザ、東声会の親分、町井久之(マチイ・ヒサユキ)と親しくしていた。

キャノンは最初、米軍の防諜機関CICで働いていた。ウイロビーの通訳に雇われていた二世は、キャノンの金庫を吹き飛ばす手伝いをしたことがあるとか、いつも映画にでてくるギャングのように振舞っていたと思いを語った。

キャノン機関が設立されると、彼は殆どのアメリカ人でも血が凍ってしまったような人間になっていった。彼は有名な左翼作家、梶わたる誘拐の黒幕であったと考えられている。又、日本国有鉄道総裁、下山の拷問、切斷、殺人は彼の仕業だ。下山の死体は線路にそってばらまかれ発見された。

キャノンは又、ウイロビーと戦犯で起訴されている児玉や辻正信大佐の様な人間とのつながりを調査していた英国、米国の外交官や将校を殺すために飛行機爆破を試みた疑われている。仕事があまりにも陰湿で汚いものだったので、アメリカ政府から完全に切り離されねばならなくなり、ウイロビーはキャノンを避け、NATHANと呼ばれる殺人部隊を紹介した。それは金の為に人殺しをする五人の日本人将校の頭文字である。より混乱させる事になったのは確かなのだが、ウイロビーは同時代の米軍人からは無能で、偏執狂で、先天的に判断ミスをごまかすため追い詰められていたと判断されている。

ウイロビーの活動に関わる文書は、半世紀たってもまだ米政府によってほ

とんど隠されたままだ。おそらく彼の救世主的な活動の中にはもつと混乱する情報があると思われる。一方、キーナン基金は正反対で文民に支配されていた。ジョセフ・キーナン、彼は別の方面で？マッカーサーと親しい東京裁判の主任検事だった。

以前は司法省刑事部局長を務めていた。そこでは「ギヤング退治」と大酒のみの評判を獲得していた。彼の東京裁判主任検事への指令は適していたとは思えない。アジアの事を何も知らないし、新聞の表面しかみていないと非難を浴びた。

トルーマン大統領は彼が嫌いで、ワシントンから放り出したかったのだ。だからこの仕事を最終的にキーナンがすることになった。キーナンの日本での補佐役には、田中隆吉以上最適者はいなかった。満州で土肥原の親友だった雄牛のような大陸浪人、薄儀の若い妻エリザベスを冷酷に扱ったあの男だ。田中は土肥原と一緒に一九三〇～四〇年代にかけて上海で秘密作戦を行っていた。土肥原と同じく、多くの要人殺人にも関わってきた。そんな彼を、戦後の東京で戦犯法廷におけるアメリカ主任検事の助手に据えるなんて最高に悪い冗談だ。

キーナンの酒癖と女癖が悪いという噂は東京にいる（もちろんワシントンにも）報道陣には周知のことであつた。田中はキーナンに付き添い小料理屋や売春宿をめぐり、その行動日誌を提出することで無事に（戦犯にならずに）家に帰ることができた。拡大する事を指示されたM資金、四谷基金とは違い、キーナン基金は狭く具体的な役割で使われた。

つまり戦争裁判の目撃者の買収、偽証させる説得の仲介人に対して使われたのだ。マニラの山下や本間はすぐに罰せられたが、東京での戦犯法廷は、三年間も引き伸ばされ、裏では汚い取引が横行していた。法廷は日本の残酷な侵略戦争を、東条と他の軍指導者や文民指導者を裁く事で終了した。国際的な委員会と名乗ってはいたが、全体の運営はもっぱらマッカーサーの身内で行われた。法廷で宣言された綱領の中でマッカーサーは広い権力を与えられ、裁判は彼一人が独占的な権威を維持していた。最終的にマッ

カーサーとキーナンが書き上げた宣言文には、「法廷は証拠だけにこだわるべきではない。」と述べられている。

そのおかげでマッカーサーの部下達は、被告達と自由に接見し、望むままに偽証させ、証拠を隠滅することもできた。

金は身代わりになる者の家族の面倒を見るためにこっそりと渡された。私達が Yamato Dynasty で証明したように、マッカーサーの軍書記官准将ポナフェラーズの私信で、彼が個人的に目撃者を偽証させ、証拠に手を加え裕仁天皇が法廷に出廷しなくても良い様にさせた事を明らかにした。

一九四六年一月二五日、マッカーサーは陸軍長官ドワイト・アイゼンハワーへ暗号電報を送りSCAPの行う取調べで裕仁に対するいかなる犯罪訴追も支持できないと言っている。

「日本国のこの十年間の各段階での政治的な決断の中で、間違いなく天皇が関係しただろうという具体的で明白な証拠はないのだ。」

バージニア州・ノースホークのマッカーサー記念館の中で、我々はある文書を見つけた。それによりマッカーサーとポナ・フェラーズは前大統領ハーバート・フーバーらと共謀し、裕仁があらゆる罪から免れる保証として、東条大将にパールハーバー攻撃の全ての責任を負わせる証言をさせた事が明らかにになった。

米内海軍大将ら仲介者は、東条との交渉や偽証の確約を取るため多額の賄賂をキーナン基金から受け取った。

フェラーズ將軍の手紙には、米内との会合で偽証を作り上げたと得意げに書かれてある。（付け加えると米内大将は裏の提督、児玉直属の上官だった。）

多くの鍵を持ちながらも偽証を拒否した者達は、手荒く殺されるか、回りから白い目で見られるようになった。

裕仁の側近で一時は首相も勤め、早期和平を模索するよう裕仁と話そうとしていた数少ない政治家、近衛公を、フェラーズとマッカーサーはひどく嫌っていた。フェローズは彼のことを「あいつは自分の主人を最大の戦犯

だと言い、自分が助かりたい為に人を売るようなネズミだ。」と非難した。近衛はマッカーサー達にバツ印を付けられ、陰口、中傷、そして有罪にされるかもしれないという暗示で絶望的に追い詰められていった。例えば、彼の名前が戦犯リストに加えられたとか、すぐにでも検挙され、投獄、処刑されるといふ偽情報が伝えられた。

一九四五年十二月十六日、近衛は回りから白い目で見られている状況の中、自宅で死んでいるのが発見された。殆どの情報筋は、彼が法廷に出る恥辱に耐えられなくて自殺したのだらうと言うが、戦後初めての自殺幫助の一例だったことは間違いない。

学者のメイリンやスージー・ハリズら多くの者は近衛が殺されたのだと信じている。なぜかという、マッカーサーは裕仁を赦免しようと狙っていると懸念を表明していたからだ。

都合よく公判が始まる前に死んだ二人の重要な参考人は朝香宮の部下だった。彼らは南京虐殺で朝香宮の身近にいて全てを知っていた。

一九四五年の末、この二人は突然の心臓病で死んだ。

キーン基金は又、生物化学兵器計画の証言や、皇室の行ったゴールデン・リリーの莫大な財宝略奪の口止めに使われた。アメリカ政府や他の連合国政府は日本の収容キャンプから捕虜を解放する時に威嚇をしたことはわかっている。彼らは帰国する前に、戦時中の略奪について、或いは七三一部隊が生物化学兵器を実験したことなど、知っている事を決して喋らないよう秘密の誓約書に署名させられた。

日本の医療実験の被害者達ですらこの誓約書を提出させられている。当時、彼らは沈黙している事が愛国者としての義務だと聞かされていた。今はもうよく分ったと思う。自分達は来るべき冷戦にそなえ、正義よりも権力者のままでいたかった自分達の政府の犠牲者だったことを・・・。

ウィロビーは又、太平洋戦争における日本軍の歴史を偽造する仕事を担当した。アメリカが冷戦兵士を必要としている事を正当化するためにだ。日本側でウィロビーの歴史改竄の協力者には、悪名高き児玉や辻達の戦犯も

入っていた。(辻はシンガポールやマラヤでの華人虐殺を立案した。)

彼らが準備した歴史論文はまず日本語で作成され、ウィロビーのATISの二世達によって翻訳された。

その論文では、少しでも機密を要するものはすべて取り除かれていた。修正を経て米政府は、「日本の研究と第二次大戦に於ける日本の教訓」というタイトルで出版した。驚く事ではないが、各章には大きな矛盾を含んでいた。正式な前書きには、「元々の命令や計画、部隊日誌などが少なかったことが編集する上で最も困難なことだった・・・しかし重要な命令、計画、見通しの多くは記憶から復元し・・・それらは概ね正確で信頼できるものと信じられる。」と説明している。

公式なフィリピン戦史の著者、ルイス・モートンによれば、第二次大戦中の太平洋とアジア作戦の日本報告書は、ウィロビーの事務所から任命された最高に重要な一人の日本人の情報が用意したものだったそうだ。ウィロビーは児玉に、新しい依頼人に気に入られるような回顧録を書くよう促めた。英語版のタイトルは驚くなかれ「I was Defeated」、私は敗れた。」それは一九五一年にCIAの所有会社、アジア出版から出版された。目次には出版人ハーベイ福田、彼が編集長をし、会計としてロバート・ブースになっている。

一九五二年には、同じ版元から辻大佐の回顧録の英語版が出されている。この男は誰？そう読者は思い出すだろう。

彼は英国の諜報部から残虐行為を追及されていた男だ。彼が戦後、連合国から隠れ、タイや中国で数年間を過ごしたと主張したという偽の話はあるものの、実際のところは児玉と同じく、彼もウィロビーとCIAに雇われていた。(訳注、この辻大佐についての記事はかなり重要だ。各種の本によっても辻大佐は謎に包まれている。)

これらの回顧録を出版した目的は、戦争責任を本来の策士からそらすため、戦後日本の政治的履歴を整える事ができたのである。

児玉の回顧録は戦争責任の大半を、彼が狂信的な戦争好きの怪物と描いた

陸・海軍の最高幹部に押し付けることになり、その大半は死刑となった。誰もかもが無力の人質だったのだ。

児玉は自分の豊かな懐から気前よく資金を用意し、ゆくゆくは合併し自由民主党となる二つの極右政党の党首に提供した。

彼の回顧録で表明している政治的な見解は、アメリカの事情聴取に備えたもので、「私はこの国において、反共産主義に多大な影響力をもっている保守勢力が戦争共謀者といわれ、その殆どが追放されていることが最も懸念するところであります。これは正に共産党の望むそのものでありまして・・・占領軍の指令で行われる追放のもっぱらの趣旨は、侵略戦争を遂行するにあたっての積極的な共謀者の除去であるべきではないでしょうか。」、児玉は自分がその種の一人に含まれるとは考えてもいなかったようだ。児玉によると、日本で贈賄行為の対象になったのは左翼だけだったという。

当時、社会党の指導者は蔓延している買収の議会追及を要求していた。頭に来た児玉は、それは「鍵穴から風呂場を覗き込むほど」無礼で、社会党に対して、「権力を保持したいなら恥知らずな不正手段」を使う事はダメだと表明した。

三十年に渡り児玉は、ATIS から派遣された二世の通訳で、児玉と辻の本の出版にも携わったハーベイ・福田と密接に仕事をした。

ソルトレイクシティに生まれた福田は反日宣伝のプロパガンダを流す戦時放送に従事していた。東京では児玉の常駐書記、通訳、秘書、広報担当としてウイロビーから任命されていた。二人の共謀はともうまくいき、福田はCIA所有の広報部門、ジャパンPRと呼ばれる会社を所有し、児玉もその会社の出資者として潤った。

児玉は英語が話せないなので、福田は児玉の取引のすべてを通訳した。アメリカがタングステンの欠乏で困窮した時、児玉は中国から略奪したタングステンのいくらかを売るように依頼された。その取引は米外交官、アーゲン・ドゥーマンと交渉したと福田は公表している。(訳注：児玉は大森

実との対談で、軍票で正式に中国から買ったもので略奪ではないと主張している。上海の中国人商人はあらゆる物資を調達でき、しかもその後ろには米英の兵器商人がいるのだという。石油、鉄、銅、何でも調達できた。それが本来、一年しかもたないはずの日本が五年も戦った原因だった。彼は、軍票で買ったものがすべて略奪だったと言われた、と述べている。)

一九五〇年後半、児玉とロッキード航空との初会合を実現させたのは、ハーベイ・福田である。そこで児玉は日本政府の高官にロッキード機の購入を促すために、賄賂を注ぎ込むことに合意した。一九七〇年代半ば、現金の運び屋としての児玉の役割が明るみにでて、巨大なスキャンダルとなり、アメリカ高官と実業界の大口が贈賄で罰せられた。どうして最も権力を持った犯罪者の首領をトルーマン、アイゼンハワー、ケネディ、ジョンソン、フォード、カーター、レーガンは連邦の従業員として雇い続けたのだろう。

そして又、何故、CIA長官として働いていたジョージ・H・W・ブッシュはそれを開示してしまったのだろう。答えは簡単だ。児玉は日本で最も熱狂的な反共産主義者でもあったからだ。

鍼灸師のように彼はどこに針をうち、どのツボを押さえればいいのかのすべてを十分に心得ていた。ロシアや共産中国の脅威に煽られて不安を感じていたワシントン政府は、アジアの地下社会に親しんでいた児玉の知識を利用して彼を効果的なフィクサーに仕立てあげた。

一九四九年、モスクワは初めての核実験を行い、同年十月には中華人民共和国が誕生した。そして八ヵ月後の一九五〇年六月、朝鮮戦争が勃発した。戦争開始直前、児玉はジョン・フォスター・ダレスと同席し、ソウルで話し合った。ダレスの派閥には日本の朝鮮ヤクザの首領で児玉が応援している町井久之も含まれていた。Freedom of Information、情報公開の下で児玉と町井がダレスとの旅行中に何をしたらかを知ろうと努力したが壁にぶつかってしまった。

マッカーサー記念館の書庫の中に、児玉がマッカーサーへ送った手紙を発

見した。そこには朝鮮でアメリカ兵と一緒に戦うため、数千人のヤクザと、旧日本陸軍兵士の用意を申し出ていた。韓国や日本の情報筋によると、その申し出は受理され、彼らは韓国兵のふりをして半島にいた国連軍に合流したという。

この分裂状態の中で日本の講和条約は極秘の中で進められ、大幅に短縮され、一九五一年四月にサンフランシスコで調印された。

条約が国務大臣、デイン・アチソンにより作られうちに、細かい条項を吉田茂総理の幹部、大蔵大臣で特別顧問の宮沢喜一を含む三人の日本人と共和党の特別交渉役ジョン・フォスター・ダレスが話し合っ秘密裏に解決していった。児玉も又、問題を話し合ったダレスの秘話を把握していた。

多くの国が賠償金の請求をしていたが、アチソンは、「日本は賠償金を支払う事が出来ない。」、という事を他の調印国にはつきりさせると言った。

同盟国が意見を寄せ合って条約文書を作ったように見えるが、ダレスが交渉し、書き上げ勝手に締結したもので、同意された根拠は今日でも謎のままで。

数年後、アチソンは回顧録の中で「賠償交渉に答えるためには・・・当時冷酷な数字で決断することを求められていた。」と認めている。

しかし、それは明らかに嘘が含まれている。日本は破産状態で賠償金を払えないとアチソンは断言した。しかし私達は知っている、それは真つ赤な嘘だということ・・・。

国土は荒廃していると言うプロパガンダにもかかわらず、占領後すぐに日本を旅した欧米人は、インフラ、工場、公共施設、鉄道は殆ど無傷なことに驚くだろう。アメリカの爆撃の選択能力に感謝するべきだ。焼夷弾は数万軒の一般市民のマツチ箱のような家屋を破壊した。東京を荒廃した町のように見せてはいるが、ほとんどの豪邸、工場、重要なインフラ設備は不思議な事に助けられたようにみえる。

ジョン・ドウワーは書いている、「貧乏人住宅地のほとんど、商店、都心の工場は全焼している・・・しかし洒落た地域の裕福な人たちの邸宅はた

くさん残っているじゃないか。東京の金融街は全然被害を受けてはいない。戦争終了時に帝国軍官僚の多くが住んでいた建物も無事だった。

鉄道は田舎へ抜け出す程度の機能はまだあったよ。米軍の爆撃に対する考え方は・・・階級差別があつたと主張しているようにみえるね。」

この内容は、一般には公表されていない。SCAPの検閲官は新聞とニュース映画で荒廃しボロボロになった国土だけをみせる様、念を入れていた。大きな金額の財産は占領前に素早く名義変更された。連合国が最初の一步を日本に踏み出す前の二週間で、東京の政府はすべての方面の金を放出した。一九七〇年代の日本人報道記者が発見した記録は、政府が兵器産業へ三千億円(当時の)近くを支払い、備蓄された物資を財閥企業へ渡した。そして降伏した後の四ヶ月で、これらの複合企業体は、戦争利益の三〇%を獲得したと明らかにした。(週刊文春、一九七九年、十月四日、二五〇日、十一月一日、M資金の真実)

目立った軍事製造会社には支払いがされた。すべての物資の新たな契約は調印され、前もって支払われた、しかし、そのほとんどは実行されなかった。例えば、後に首相になる田中角栄はピストリングの工場を韓国へ移転するために数百万ドル受取り、仕事は全く完了していない事が知られている。当時まだ小物だった田中も、要職にある個人が銀行から引き出し、財産を隠匿するための「破れかぶれの配給」に参加する事を政府から認められていた。田中は軍票で受け取った。しかし田中は、すぐに韓国へ飛べば、朝鮮の日本銀行で金の延べ棒に換えてもらえると聞いた、彼はその通りに行動し、金をもらっつて海軍の軍船で帰国した。

連合国が到着しても、彼らは鼻先で行われていることに実際は興味がなかった事は明らかで、日本政府の金(カネ)の流出は継続していた。

ドウワーはこの三億トンに近い物資がどんなものかを説明した。ダイヤ、金、銀、鉄鋼、ゴム、薬品、油、塩、麻薬、チタン、価値は、米ドル一九四五年換算で二百億ドル、現在の価値では二千億ドル(二五兆円)であると言った。連合軍自体も備蓄品の中から日本政府へ一千億円を譲っている。

例えば、衣料、食料、医薬品を一般市民への配給品として。

物資が闇市場に消えたかわりにギャング達は一財産をこさえた。アヘン、ヘロイン、モルヒネの在庫は医薬品の中へ消えていった。ドウワーは、「終戦時、銀行の個人口座には二六四〇億円があった。その殆どは早々と闇市の取引で消えてしまったようだ。」と記している。

それらの図式にはゴールデン・リリーの略奪品やヘロイン取引の儲けは入っていないが、それでも今日の価値にして、一年に三十億ドルもあった。(三六〇〇億円)

ドウワーはついでに、「敗戦からのめざましい復興の中で、高い地位にいたたくさんの人達は自分達の利益をまったく失っていないんだ。むしろ、軍事備蓄品や民衆のための物資を略奪し、貧乏人にかわってかき集めたようだ。」と付け加えた。

占領中、日本の一般市民は十分に稼ぐ事と、毎日の食料を調達することの二つの仕事が必要だった。同じ頃、裕仁は、自分のスイス銀行口座において、利息だけで年五千万ドルを稼いでいた。

ワシントン政府は、世界に向かって、日本は破産し、産業は破壊された、日本政府が被害者に賠償金を払う事は不可能だと繰り返し語っていた。冷戦は大戦中の市民被害者、又は戦死したかとはもかく、死んだ者へのお詫びの気持ちを持たせてさせるきっかけにはなった。しかし、残酷な目にあったり、奴隷の扱いを受けた人達はまだ生き残っているのだ。

強制労働者を最も熱心に使ったのは、日本の財閥企業で、特に三井、三菱、住友だった。十万人以上の連合軍捕虜や抑留者が強制労働者にさせられ、日本中の鉱山、鉄鋼所、建築現場、工場の悪い環境で使われた。多くは亡くなり、ある者は不具者となり、何も補償されなかった。

日本の支配者層は戦時中の財閥とは何の関わりもないと今も言っているが、戦後まったく解体されていないではないか。

日本が植民地政策を拡大した一八九五年〜一九四五年の間に、財閥が蓄積した資本はアメリカ力占領時にも無償のまま残った。

ドウワーは言う、「戦争の指導者がそのまま支配者として君臨し、自分達が戦時中に行ってきた行為を自分達自身でごまかしたのさ。」

不思議な事に、米国占領公式記録には、最も機密性の高い日本の金の備蓄、略奪した絵画、文化遺産、宗教的な像、宝石、祖先からの家財の帳簿、十二カ国の金庫から盗んだ物や地下埋葬所、皇帝の墓から盗んだ明細はどこにも載っていない。もしも隠された情報が公開されれば、一九五一年の講和条約や、ジョン・フォスター・ダレスによって作成された秘密交渉は大衆の笑いものになるだろう。

これらの交渉中、ダレスは連合国に対し素知らぬ顔でごまかしていた。英国が提出した第一回目の試案の三九条には、「日本は三年のうちに貨幣準備金で六千万ポンドの賠償をするべきだ。」とあった。(この金(Gold)は自らの通貨を保護するため、あるいは外国の物資を買うために国家が中央銀行に置いてあるものだ。)

又、その五三條の提案には、「日本が略奪したり、不法に移転した貨幣用の準備金すべてを連合国に返還するべきだ。」とある。

略奪の合計額は具体的に文書に書かれたのではなく、声明のなかで日本が東アジア英国領とはまったく違ったところで大量の略奪をしたと断言している。

三九条、五三條どちらも「貨幣用でない金」については何もふれていない。(つまり、それらの国の博物館や個人的な宗教上の特注品から盗んだ金、宝石、小さな金のバー、絵画、仏像などを秘かに手に入れたもの)

英財務省は、ワシントン政府の日本の金庫は空っぽだったという話に啞然としてしまった。

金についての考察は次のように取り上げている。

「我々は日本から入る『準備金への金(Gold)』の賠償が我々の財政を安定するための重要な要点のひとつと考える。」

しかしながら、ダレスが反撃する好機を得た後の翌月、一九五一年四月、英国外務省は、「日本に金(Gold)をそのまま残すことを米国と同意する

よう我々が態度を修正しなければならぬ理由」を求めた。そして「我々は日本から金(ゴールド)を持ち去ることができるとしても、(これについて同意はまったくくないが)現実的な目的として我々がその分け前にあずかる可能性がないことは今では明らかではないか。」

英国の強国としての地位はアメリカの圧力のもとで、地に落ちてしまった。公式な英国の記録に、米国とSCAPの見解として、「金(ゴールド)は日本の一般人の安定を救うため、外国との物資調達の補償分として日本に残すべきだ。」と述べていると続けている。

英国も最後には屈服して、「我々は条約の中で金については触れないことで合意に達した。」と述べた。

他の連合国もそれにならった。英国は日本の戦後経済における本当の姿に騙されていたのだろうか?そんなことはあるまい。起きてしまった略奪を知らないどころか、財宝がどうなったのかも知っているはずだ。

CIA上層部からの情報で、「ブラック・イーグル信託」を設立するにあたり、英国最大の資本家が参加した事を我々は知っている。

この本に伴って作ったCDに載せた大量の文書には、サンタ・ロマーナが発掘した金の延べ棒が、最後にはロンドン・シティの金取引所と英国財務省に入ったことを明らかにしている。

ランスデルとサンタ・ロマーナが発掘した金を運び出した時、金の移動に伴う銀行の書類や損害保険証書で、英国の商用銀行の口座に大量のゴールドが置かれたことを証明した。

それ故、英国もいろいろな手段で「ブラック・イーグル信託」から利益を得ていたのだ。最終的な講和条約の表現では、将来において個人が個別に賠償を請求するようないかなる取り組みも禁止しようとした。それは十四条で繰り返し表現してある。

戦争中に傷つけられたり、被害にあった連合国列強に対し賠償を支払うべきだという認識はある。但し日本にその原資が存在しないことも又認識されている。

条約はアメリカ大使、ジョゼフ・グルーのようなほんの限られた実業家と外交員に提出された。

彼らはパール・ハーバーの後、没収されていた個人的な所有地や財産を回復することができた。もし、厳しい期限のうちに応募者は所有者の資格を取れない場合、日本は財産を取り上げたままになっている。

殆どの人にこの条項は知らされなかったため、とても多くの財産が所有権の主張がないまま日本政府のものになり、後日素晴らしい利益を生み出し、自由民主党を支える墮落した政治家がそれを利用した。

条約では次のように宣言されている。

「現在の条約で決められたものと異なると考えられるもので、列強が主張している全ての賠償、日本軍の行動を原因とする列強各国の要求、国家的な刑事訴追の道、占領するに要した直接的な費用などは放棄する。」

英国外務省の文書によれば、「カナダ当局自身は賠償の条約については市民の利益を補償すべく作られるべきものと考えていた。実際のところワシントンに疑問が湧いてくる・・・略・・・しかし、会談の席で抵抗する人もそこを追及しなかった。」

結果、外務省は記している。「もし条約十六条を市民にまで広げると、要求する人数があまりにも増大し、一人当たりの金額は馬鹿馬鹿しいものになるだろう。だから入れ物を掃除するため、アメリカ政府は不当にも慰安婦、アジアの強制労働者、連合国捕虜への門戸を閉ざしてしまった。」

最初は日本軍に、そして次にサンフランシスコ条約で被害にあった七〇万人の慰安婦は今も生きています。

ワシントンが正当な市民を放り出した事実はさておき、日本が将来ままとった金額を各国に支払うと約束した条約二六条には抜け穴があった。条約に調印した国に同様の補償を求める新しい主張を訴える権利が与えられた。結局日本は、ビルマやオランダ、スイスなどの他の国々へは別個に補償を行った。だから理論的に言うと、すべての日本の被害者は再交渉できるのだ。

現在カリフォルニアで進められているように、法律の門が開かれるべきだ。一九五一年の講和条約は嘘と欺瞞をもとにしているため根拠が薄いことは明らかなのに、米、英政府ともに一九四五年以来、日本による被害者になされた不法を正す全ての努力を全力で防止してきた。

今日まで、国務省、司法省、日本外務省は一九五一年の講和条約を引き合いにだし、被害者が賠償を求めるいかなる試みも防ぎ、長い間否定してきた。

二〇〇〇年、ドイツ政府と経済界は、ついにナチス強制労働者への賠償金五十億ドルを提供する事を認めた。大統領ビル・クリントンは「正義のために五十年待つていた不幸なナチス強制労働者にとって重要な日である。」と述べた。

その数ヶ月前、クリントンの使者トーマス・フォリイーが日本に来て、日本人による被害者の要求に対してきっぱりと拒絶した。

フォリイーは「講和条約は日本に対する全ての要求を片付けている。」と述べた。日本の外務大臣もそろって、「五十年前に決まったことをどうして持ち出すのかまったく驚きですね。第二次大戦からのすべての要求、日本が起した行動から持ち上がった米国やその国民からの要求も含め、すべては既に解決しておりますけん。」と述べた。

今、日本での興味深い事は、大使フォリイーの妻は住友のコンサルタントでしっかりと稼いでいる、住友こそ、あの強制労働訴訟の一番の焦点じゃないか。被害者からの正義の訴えに対するフォリイーの拒絶は、彼の主席補佐官、クリストファー・J・ラフローワーが繰り返し返す事で強化された。

なぜだめなのか？彼は宮沢喜一の義理の息子で、宮沢は講和条約でジョン・フォスター・ダレスと秘密交渉を行った日本人の一人なのだ。条約は日本人による被害者にいかなる形でも賠償させない形で作られた。それ以来宮沢は、自民党の大物に居座り、金融関係最高責任者であり、M資金と一心同体となった。

訳者より。この章の翻訳も大変に疲れた。M資金でこれほど詳しく解説してあるものは今までにお目にかかっていない。しかし、週刊文春がそのまま追求していた事を知らなかった。さっそく文春に問い合わせ、現物をたのんでみる事にしよう。

それにしても、戦争で、日本のエリート、財閥、そして皇族にほとんど被害がなく、その上、ドサクサのなかで資産を増やしたのが本当なら、天皇陛下万歳と叫んでいった人達は(もつとも本当にそうだったのかはわからないが、)あまりにも惨めではないか。

捏造されてきた歴史の中でもこれほどのひどい捏造は過去にない。天皇の出自がどこであるかが我々の生活に何の影響もない。しかし、国民に資産を供出させ、命を奪い、自分たちが潤い、そして今も日本を支配するなど許されるはずがない。

シーグレイプ氏はさらりと書いているが、日本人はどうしてこんなに人がいいのだろうか。